

## 第80回麻布獣医学会 一般講演1

## イヌ漿膜系リンパ排導路について

柴田 真治<sup>1</sup>, 平松 雄二<sup>2</sup>, 市原 伸恒<sup>2</sup>, 浅利 昌男<sup>2</sup>, 早川 敏之<sup>3</sup><sup>1</sup>関動物病院, <sup>2</sup>麻布大学・解剖学第一研究室, <sup>3</sup>東京慈恵会医科大学・解剖学講座第一

前回の第79回麻布獣医学会において、我々は腹部癌（腫瘍）の他部への転移経路を把握する研究の一環として、ラットの漿膜系排導路およびその漏出の経時的变化について報告した。今回はそれに引き続き、イヌの漿膜系排導路について調べた。方法は1つの時系列につき1頭のイヌを用い、精製墨汁を腹腔内に投与した後、30分、時間、2時間と時間をあけ、それらの排導の様子について経時的に観察した。ラットの漿膜系リンパ排導路では、①横隔膜から吸収されたものを排導する経路で最も優位に働く、内胸動静脈に沿うリンパ管が前縦隔リンパ節内側群に注ぐ経路、②横隔神経あるいは後大静脈に沿って胸郭前口に向かい、上前縦隔リンパ節内側群に注ぐ経路、③左右差があり、右側の方が優位に働く背側の胸椎側リンパ幹管に注ぐ経路、それらに加えて腹腔動脈領域のリンパを集めている腹腔リンパ節、および不定なリンパ節である乳び槽リンパ節を介して大動脈右側に併走する胸管の起始部に注ぐ経路の計7つの排導路が認められた。これらのリンパ管排導路は一貫して右側方向へと流れる傾向があり、また胸管を通過しての排導の開始は7つの経路の中で最も時間が遅れて起こった。これらのdataと今回の実験の結果を比較し、イヌの漿膜系排導路について次のようなことが示唆された。

- ① 腹腔側漿膜面から横隔膜への墨汁粒子の吸収において、食道裂孔を中心とした場合、横隔膜の右側のリンパ管への排導の開始が早く、右側へのリンパ管が飽和してから左側のリンパ管への排導が開始する傾向があった。
- ② 横隔膜から吸収された墨汁粒子を排導する経路で最も優位で重要なものはラットと同様、内胸動静脈に沿うリンパ管経路であった。そこで同動静脈に伴い前縦隔リンパ節群へ速やかな墨汁粒子の流入が見られた。
- ③ 胸管への排導はラットと同様、最も排導が開始される時間が遅く、投与後30分の個体では墨の流入は全く見られなかった。
- ④ ラットで観察された横隔神経あるいは後大静脈に沿うリンパ管は、イヌでは観察されなかった。一方ラットでは観察されなかった、食道あるいは左迷走神経に伴っているリンパ管が観察され、イヌの場合の漿膜系リンパ排導路のひとつとして考えられた。